

一次産品ブームによるブラジルの輸出構造の変化

経済調査部 上席研究員 森川 央
morikawa@iima.or.jp

1. 新興国の生産工程向け輸出が急増

2000年代に入ると、新興国経済、特に中国経済の躍進に伴い、一次産品需要が急増し価格も高騰した。農作物、鉄鉱石の世界的な生産国であるブラジル経済は、そのブームに乗り輸出を急増させた。輸出は2002年の1,116億ドル（実質価格）から、12年後の2014年には2,320億ドルへと2.1倍になった。

この急増はどのような財がどこへ向けられることで起こったのか。世界産業連関表（World Input-Output Tables）は、輸出についても地域別に中間投入だったか、最終需要向けであったかが分けられている。これを活用しブラジルの輸出を用途別にみると、この間増加していたのは外国の生産工程に投じられる中間財であった。

図表 1 ブラジルの用途別地域別輸出

ブラジル	中間投入				最終需要				総計
	農産物・食品	鉱産物・製品	製造業製品	合計	農産物・食品	鉱産物・製品	製造業製品	合計	
2002年									
欧州	52	30	34	116	76	32	53	160	276
アジア	22	32	15	69	29	33	19	81	151
北米	12	56	57	125	20	62	155	236	361
その他	29	55	41	125	68	56	80	204	328
合計	115	173	146	434	193	182	306	681	1,116
2014年									
欧州	125	77	76	277	52	3	33	88	365
アジア	250	218	59	526	33	1	19	53	579
北米	33	125	110	267	15	6	69	89	357
その他	149	351	157	657	178	12	172	362	1,019
合計	557	769	401	1,727	278	22	293	593	2,320

（資料）World Input-Output Table, 2002, 2014

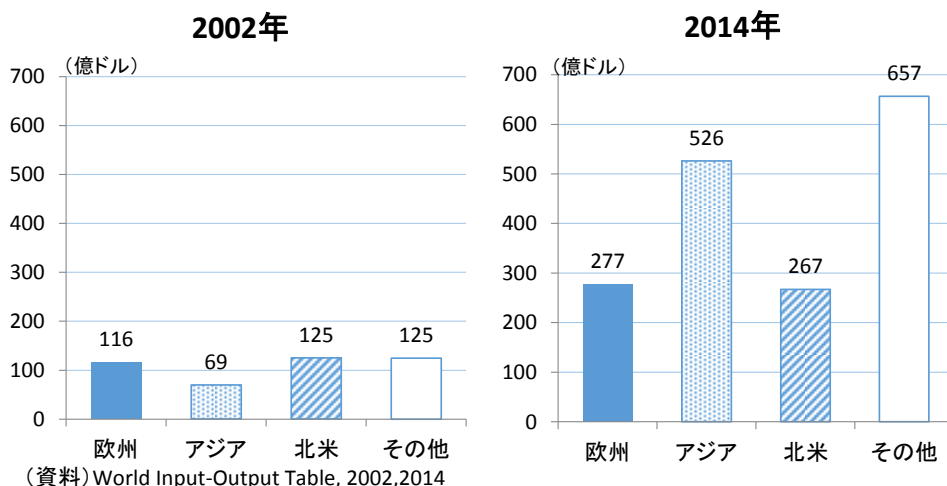
中間投入向けは434億ドル（2002年）から1,727億ドル（2014年）へと約4倍に増加していた（図表1）。更に内容を詳しくみると、農産物・食品が4.8倍（442億ドル増）、鉱産物・製品¹が4.5倍（596億ドル増）に成長しており、全体の増加分（1,293億ドル）の80%を占めている。製造業製品も増加したが寄与率は2割でしかなかった。一次産品ブーム下、ブラジルは原材料中心に輸出拡大を果たした姿が浮かび上がる。

次に中間投入向け輸出を地域別にみると、全ての地域向けで増加しているが、特に増

¹ 石炭、原油、鉄鉱石など地下資源のほか、コークス、粗鋼など比較的加工度の低い製品を含んでいる。

加が目立つのはアジア向け²で、457 億ドル増加、7.6 倍になっている（69 億ドル→526 億ドル）。その他地域³も 125 億ドルから 657 億ドルへと 5.3 倍になっている。欧米向けはせいぜい 2 倍強であるので、新興国の資源需要が際立って大きかったことがわかる。アジアとその他地域に輸出された農産物・食品は、2002 年 51 億ドルから 2014 年には 399 億ドルへ、鉱産物・製品は同期間に 87 億ドルから 569 億ドルへ増加していたのである。

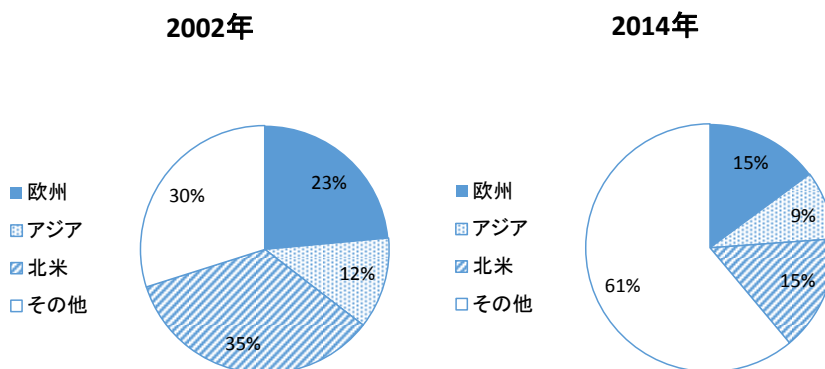
図表 2 ブラジルの地域別中間投入向け輸出



2. 先進国への最終需要向け輸出は減少

その一方、最終需要向け輸出は減少していた。外国の最終需要を満たす輸出は 2002 年の 681 億ドルから 88 億ドル減少し、2014 年には 593 億ドルになっていた。品目別にみると、鉱産物・製品の輸出が大幅に減少（182 億ドル→22 億ドル）したほか、製造業製品も小幅の減少となっていたことがわかる（306 億ドル→293 億ドル）。

図表 3 ブラジルの地域別最終需要向け輸出構成比



(資料) World Input-Output Table, 2002,2014

² 日本、台湾、韓国、中国

³ ロシア、中近東、インド、豪州、南米、アフリカ諸国を含む

特に、先進国向けの輸出は減少幅が大きい。北米向け－147億ドル（236億ドル→89億ドル）、欧州向け－72億ドル（160億ドル→88億ドル）となっている。その結果、それぞれのシェアは15%へと低下した（図表3）。

こうした変化を総合すると、ブラジルは一次産品ブームの間、新興国への一次産品供給へ傾斜する一方、先進国の最終需要向けの輸出は減少した。

新興国の最終需要向け輸出は増加していたが、先進国向けの輸出の減少は補えず、結果として輸出の「脱工業化」、一次産品依存が進んでしまった。その結果、一次産品需要が後退し、価格が低下してしまうと、ブラジルは極度の輸出不振に見舞われることになったのである。

3. 「資源の呪い」は不可避なのか

中東の産油国を筆頭に、資源依存からの脱却を掲げている国は多いが、成功例は多くない。そうしたなか、インドネシアは比較的産業の高度化に成功している。図表4は図表1と同じ仕様で作成したインドネシアの輸出構造である。

図表4 インドネシアの用途別地域別輸出

インドネシア 2002年	中間投入				最終需要				総計
	農産物・食品	鉱物・製品	製造業製品	合計	農産物・食品	鉱物・製品	製造業製品	合計	
欧州	10	17	19	49	4	2	40	45	94
アジア	13	133	59	211	14	9	25	49	260
北米	4	7	21	33	5	2	64	70	103
その他	15	61	53	152	8	3	30	41	193
合計	42	218	152	445	31	16	159	206	650

(億ドル)

2014年	中間投入				最終需要				総計
	農産物・食品	鉱物・製品	製造業製品	合計	農産物・食品	鉱物・製品	製造業製品	合計	
欧州	44	17	56	124	52	19	116	187	311
アジア	81	333	166	605	105	345	237	687	1,293
北米	15	11	61	89	34	12	175	222	310
その他	128	351	206	734	175	372	341	887	1,622
合計	269	712	488	1,553	367	748	869	1,983	3,536

(資料)World Input-Output Table, 2002, 2014

2002年のインドネシアの輸出総額は650億ドルとブラジル（1,116億ドル）の6割弱であった。中間投入向け輸出は同等（インドネシア445億ドル、ブラジル434億ドル）であったが、最終需要向けではインドネシア206億ドルに対し、ブラジルは681億ドルと約3.3倍の規模になっていたからである。製造業製品に限ってもインドネシア159億ドルに対し、ブラジルは306億ドルと2倍近い大きさであった。

ところが2014年になると輸出額は逆転する。インドネシア3,536億ドルに対し、ブラジルは2,320億ドルだった。

中間投入向け輸出には大きな差はない。インドネシアは1,553億ドルとブラジルの1,727億ドルをやや下回っている。大差が生まれているのは、最終需要向け輸出である。

インドネシアの最終需要向け輸出は1,983億ドルであるのに対し、ブラジルは593億ドルに過ぎない。農産物・食品輸出については両国の差は小さいが、鉱物・製品、製造

業製品で大きな差がついている。地域別の製品輸出をみると、インドネシアはアジアだけでなく、欧米やその他地域でもブラジルを圧倒している。

インドネシアも一次産品輸出国として出発したが付加価値を高める努力を続け、消費財や投資財の輸出を増やしてきたことがうかがえる。

インドネシアに限らず東南アジア諸国は開放的な経済政策を採り、諸外国との経済的連携を高めてきた。こうした取り組みは、ブラジルにとっても有益な示唆になると思われる。ブラジルで、アジアへの関心が高まることを期待したい。

図表 5 最終需要向け輸出の比較

(億ドル)

	インドネシア			
	農産物・食品	鉱物・製品	製造業製品	合計
欧州	52	19	116	187
アジア	105	345	237	687
北米	34	12	175	222
その他	175	372	341	887
合計	367	748	869	1,983
	ブラジル			
	農産物・食品	鉱物・製品	製造業製品	合計
欧州	52	3	33	88
アジア	33	1	19	53
北米	15	6	69	89
その他	178	12	172	362
合計	278	22	293	593

(資料)World Input-Output Table, 2002, 2014

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2017 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-Chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話：03-3245-6934 (代) ファックス：03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>